



渋沢 栄一
しぶさわ えいいち

〔第十三話〕

明治・大正における経済界の巨人といわれた渋沢栄一は、武蔵国血洗島（埼玉
県深谷市）に生まれました。藍の葉から藍玉（染料）を製造・販売するという、
商工業をかねた大きな農家でした。父も学問好きな人だったので、栄一は六歳の
ころから孝経・論語などの古典を学び、やがて商売も手伝います。

栄一の生涯をつらぬく考えは、道徳と経済の合一でしたが、これを別な表現で
いったのが、「論語と算盤」です。経営や商売の根本に道徳をおくという意味で、
二宮尊徳の考えと共通するものがあります。これは、栄一の場合、家庭や環境に
よって、この幼少時代からつちかわれてきたにちがいありません。

江戸に出て学問や剣術を修業するうちに、なかまの青年たちとともに、尊皇攘
夷の思想を抱くようになり、高崎城ののとりや、横浜の異人館焼き討ちの計画

までたてます。武器も準備したのですが、仲間の意見がわかれて中止しました。しかしこのため幕府の役人にねらわれ、父のすすめで伊勢神宮参拝の旅に出、その後京都にかくれます。

ここで一橋慶喜の用人平岡円四郎ひらおかえんしろうと会い、いとこの渋沢喜作しぶざわきさくと一緒に一橋家に仕えることになりました。幕府をたおすことまで考えたのが、やがて第十五代將軍となる慶喜の家来けらいとは、運命のいたずらともいえるべきでしょう。

農民の出身ながら、慶喜に才能や手腕をみとめられて働く栄一は、やがてフランスに渡航する機会に恵まれました。パリで世界大博覧会が開かれ、日本の使節として徳川昭武とくがわあきたけ（慶喜の弟・十四歳）が行くことになり、そのお伴ともを命ぜられたのであります。ときに栄一は二十八歳です。

先年までの攘夷論者が、西洋の文化に圧倒され、経済や商法を学んで帰国します。このとき、一行の会計係であった栄一が、約二万両の金をフランスの公債と鉄道会社の社債にしておいて、倍の四万両に増やした話は有名です。

明治新政府に起用され、民部省（今の大蔵省と自治省をあわせたようなもの）

の基礎づくりをしますが、やがて辞職して民間で大いに力を発揮します。

たずさわった事業は実業分野が銀行・保険・ガス・紡績・建設・製紙・製鉄・ビールなど各業界の先駆となった会社創設が約五百社。福祉・医療・教育など社会公共事業が養育院・病院・大学その他六百あまり。商工会議所や証券取引所、さらには国際通信社等々、驚くほど多方面に栄一の手がおよんでいます。

一橋家の家臣であったころ、西郷さんや、新撰組の近藤勇・土方歳三らとも仲よくなり、人柄を愛され、能力を高く評価された栄一でした。

昭和四年八十九歳のとき、天皇からただひとりだけで昼食にお招きを受けました。高齢の栄一のために、とくにやわらかいものばかりが用意されていて、お若かった陛下が、栄一の長い身の上話をやさしくお聞きくださったそうです。

栄一の「論語講義」は大冊ですが、いわゆる学者の研究書や解釈本よりも、はるかにわかりやすく、深みがあるのでおすすめていたします。

長寿の秘訣を問われると栄一は「怒らないこと、仕事を楽しむこと」と答えるのが常でありました。

昭和六年（一九三一）九十一歳没

○ あれだけの数々の大事業を成功された秘訣に古典があつた。私も「論語」を少しずつ学んでいます。

○ 歴史を学ぶと、嬉しくなる発見があります。

○ 渋沢栄一が西郷さん、近藤勇、土方歳三との交流があつたとは……………。

○ 「怒らないこと、仕事を楽しむこと」を肝きもに銘じました。

（M生）